

サン・ソレイユ（日本語版）

翻訳	福嶋裕子
台本	原章二／野枝実
録音台本監修	梅本洋一
日本語版演出	野上照代
ナレーション	池田理代子
録音	青山録音センター
制作	アテネ・フランス文化センター

1

字幕

国と国の距離が離れていることが、時代が近過ぎる点をいくらか償つてくれる。

ラシーヌ「バジャゼ」第二の序文

2

アイスランドの三人の少女

(黒画面にかぶせて)

彼が、私に最初に語った映像は、一九六五年のアイスランドの三人の少女たちだった。

3

航空母艦上のジェット戦闘機

(黒画面にかぶせて)

それは、幸福の映像だった。何度も他の映像とモンタージュしようとしたが、うまくいかなかつた。

彼は、私にこう書いてきた。

いつか、このカットに黒い画面をモンタージュして、ファースト・シーンにしよう。幸福がかいま見れなかつたとしても、黒だけは見えるだろう。

4 メイン・タイトル「サン・ソレイユ」

5 青函連絡船

彼は私にこう書いてきた。

僕は北の島、北海道から帰るところだ。人々は、待機と寸断されたまどろみの中にいる。僕にはそれが、過去か未来の戦争を連想させる。夜行列車、空襲警報、核シェルター。日常の中の戦争の断片。

彼が愛したのは、こうした宙吊りの瞬間だった。

彼は、こう書いてきた。

すでに、地球を何周かして来たけれど、いまだに興味を引かれるのは、平凡さだ。僕はこの旅の間じゅう、お尋ね者を追う賞金稼ぎのように、平凡さを、執ように追い求めた。

夜明に、僕らは東京に着くだろう。

彼は、アフリカから書いてきた。

アフリカの時間の中にいて、ヨーロッパの時間、アジアの時間に思いを巡らす。十九世紀、人類は空間を征服した。二十世紀に賭けられているのは、様々な時間の共存だ。

あなたは、イル・ドゥ・フランスにエミューがいるのを知つて

いるだろうか。

9 ビジャゴスの娘

彼は、私に書いてきた。

ビジャゴス島では、婚約者を選ぶのは、娘たちだ。東京の郊外には、猫のための寺がある。

10 豪徳寺にやつて来た夫婦

猫の墓を作りに来たこの夫婦の気取りのなさ、自然さを、あなたにうまく伝えることが出来るだろうか。

こうすれば彼らの猫トラは、あの世に行けるだろう。トラは、死んだのではない。ただ、旅に出ただけなのだ。どうやってトラの為に祈ればいいのだろう。死は、ちゃんとトラの名を呼んでくれるだろうか。それは、誰にも分からない。だから、こうして、雨の中、二人は、時間の裂け目を縫い合わせる儀式を行わねばならないのだ。

彼はこう書いてきた。

僕は、思い出の働きについて考えることに、人生を費やしてしまっただろう。

思い出は、忘却の反語ではない。僕たちは思い出によって記憶を取り戻すのではない。歴史を書き直す様に、記憶を書き直すのだ。

なみだ橋の浮浪者たち

彼は、何も好んで悲惨な光景を写した訳ではない。だが、ここには社会の規範からはみだした人々の姿がある。彼らは、ビールやどぶろくに酔い痴れる。

ここは、華やかな市街から二十分のなみだ橋。今朝も、この交差点で、一人の男が、交通整理をしていた。彼はこうして、社会に報復しているのだ。

彼らにとって、ぜいたくとは、お彼岸の日に墓に注ぐ一升の酒だろう。

13

なみだ橋の飲み屋

僕は、なみだ橋の飲み屋で、彼らに酒をおごった。
こうした場では、特權的なまなざしは、存在しない。敷居を跨
げば、誰もが平等なのだ。

14

フォゴ島の桟橋に集う人々

彼は、カポヴエルデのフォゴ島の桟橋のことを、伝えてきた。
いつから、彼らはここで、船を待っているのだろうか。石のよ
うに我慢強く、だが同時に、今にも飛び出さんばかりの様子で。
彼らは植民地時代、ポルトガル人との混血の果てに生み落とさ
れた。彼らは、世界を股にかける放浪の民。無から生まれた民
族。空虚の民族。垂直の民族なのだ。
映画学校が教える、視線をカメラから外せということほど、馬
鹿げたものはない。

15

サエルの砂漠に横たわる動物の死骸

彼はまた、こう書いてきた。

砂漠と化したサエルだけが、この地方の姿ではない。だが、沈没する船が水を吸い込むように、乾きを吸い込んで行く。

動物たちは、カーニバルで蘇つたが、新たなかんばつとともに、石となってしまうだろう。それが、豊かな国が忘れてしまった生の存続状態なのだ。しかし、そのことを忘れていない例外的な国がある。そう、日本だ。

16

ギニア・ビサウのカーニバル

僕の絶えまない東西往復は、この生の存続の二つの極地への旅なのだ。

17

ロケットの打上げ

彼は、清少納言の話をしてくれた。十一世紀始め、皇后、定子

彼は、こう書いてきた。
僕は、千葉の海岸を通つて帰つて来る。清少納言のリストの二

に仕えた女性だ。

一体、歴史がどこで演じられるのか、わかることがあるのだろうか。彼女の時代、統治者たちは、複雑な政略をめぐらし、対決しあつていた。眞の権力は、世襲の摂関家に握られ、宫廷は権謀術数の場と化していた。

ある人々は、世情を離れる慰めの術を学んだ。日常、自然を微細に眺め、そこに憂愁を感じたのである。それは、日本人の感性に深い足跡を残した。

清少納言は、リストを作ることを好んだ。優雅なもののリスト、嘆かわしいもののリスト、行う価値のないもののリスト、といったふうに。ある日彼女は、胸をときめかせるもののリスト、を作ることを思い付いた。

これは、悪くない基準だと、撮影をする時、僕は思う。経済の奇跡も結構だが、僕が君に見せたいのは、町の祭りだ。

と、胸をときめかすには、ただ名付けるだけで良いあの記号のことを考えている。

僕たちの国では、太陽はまぶしくなければ、太陽ではないし、泉は澄み切つていなければ、泉ではない。ところが日本では、形容詞をつけることは、贈り物に、値札をつけたままにしておくくらいに、無作法なことだ。日本の詩は、形容をしない。船、岩、波、蛙、鶴、あられ、鷺、菊。そうしたものすべてを一言で語る言い方があるのだ。

このところ、新聞では、名古屋の男のこと、もちきりだ。彼の愛した女性が去年死んだ。彼は、仕事に没頭した。エレクトロニクスの重要な発明さえしたらしい。だが、五月になって、彼は自殺した。春という言葉を聞くのに耐えられなかつたらしい。

19

東京に向かう高速道路は、停滞している

彼は、東京再訪の様子を伝えてきた。バスケットに入つてヴァカンスから帰つてきた猫が、部屋じゅうを調べ回るように、彼もあらゆるもののが、もとのところにあるかを、急いで確かめた。銀座のふくろう。新橋の蒸気機関車。三越の屋上にある稻荷。

そこは、ロック歌手に群がる少女たちで一杯だった。今では人

大都市、東京の街並み

彼はこう書いてきた。

東京は電車が走り回り、電線で縫い合わされた都市だ。人は、テレビがこの都市の住民たちを文盲にしていると言う。だが、僕はこれ程多くの人が本を読んでいるのを見たことがない。彼らは外でしか本を読まないのだろうか。それとも、読んでいるふりをしているのだろうか。

僕は、新宿の紀伊国屋で待ち合わせをする。千年も前に絵巻物

気を左右するのは、彼女たちで、プロデューサーたちも少女たちの前では、震え上がるのだと聞いた。

顔の変形した女が、通りすがりの人の前でマスクを外し、美しい、と言わないと、引っ搔くという話もきいた。サッカーのプラティーンのゴールには目も向けない彼が、千代の富士の番付を熱心に調べた。彼はまた、皇室や皇太子のこと、テレビで子供たちに善行を説く年とった右翼の噂を尋ねた。

東京の名も知らぬ千二百万の住民が、今まで知らなかつた、自分の国、自分の家庭にもどるという単純な喜びを、彼に与えてくれたのだつた。

というシネマスコープを発明した日本人の絵画的才能は、心なきライターと検閲の犠牲となつたコミックのヒロインたちの悲しい運命を、少しは償つてゐる。

21

奇抜なスタイルのビルと巨大な彫像

ここは惑星モンゴなのだ。プラスチック化されたバロックから、ひわいなスター・リン主義に至る彫像の群れを、誰が気付かずに入れよう。そして、のしかかるような眼差しを投げ掛けるこれらの巨大な顔。

22

階段を登る人々

夜が近付くと、この巨大な都市は、いくつもの村に分解していく。銀行の影にある墓地、駅、そして寺。摩天楼の足もとに隠れた、田舎が姿を現わし、東京は村に戻つていくのだ。

23

東京暮色

新宿の小さなバーは、吹く人にしか聞こえないと言うインディオの笛を彼に思い出させた。ゴダールかシェークスピアのように「何処から聞こえてくるのだ?」と叫ぶこともできたろう。

24

お好み焼き屋の中

しばらくして彼は、山田氏の西日暮里の「アクション・クッキング」のことを語った。

山田氏の調理を観察すると、絵画にも武道にも通ずる有益な思索ができる、と彼は言う。山田氏の動作が細やかであるが故に、様式の本質を把握しているのだ、と彼は言い張る。そして、それ故に、東京の第一日目に、見えない筆で「終り」と書くのは、彼でなければならない、と

25 テレビ画面—奈良の鹿

僕は、思い出の小箱、テレビの前で一日を過ごした。

僕は鹿のいる奈良にいた。僕は写真を撮った。

「鶴の影 さかしまに見る青柳」と言う、芭蕉の一句を知らなかつた。

26

テレビ画面—コマーシャル・フィルム

僕の目には、日本のコマーシャルもまた、俳句のように見える。勿論、日本語が分らない事で、喜びが増しているのは明らかだ。

一瞬、日本語を理解したかと、画面に目を凝らしたら、NHK のネルバルについての教養番組だった。

27

テレビ画面—カンボジア虐殺の絵

八時四十分。画面は、ルソーから赤いクメールへと移る。歴史

テレビ画面ー妖怪映画と夏目雅子

名前と顔のある恐怖を追い払うためには、恐怖に別の名前、別の顔を与えるなければならない。

日本のスリラー映画には、ある種の、内に籠もった美しさがある。時折、あまりの残酷さに圧倒されて、僕は考えてしまう。アジアの人々は、長い苦しみに慣れてしまい、苦しみさえも装飾されるようになつたのではないかと。

だが、報いは訪れる。妖怪たちの間から夏目雅子が昇天するのだ。絶対的な美にも、名前と顔がある。

しかし、日本のテレビを見れば見るほど、テレビに見られていくという気がしてくる。

の必然だろうか、偶然の一一致なのだろうか。「地獄の默示録」の中で、マーロン・ブランドが決定的な事を言っていた。

「恐怖には、名前と顔がある。恐怖を味方にしなければならない」

テレビ画面—選挙事務所

すべては眼の魔術的機能によつてゐることを、テレビのニュースさえもが証明している。

今は、選挙の季節だ。当選した候補者は、ダルマに目を書き込む。落選者は、無念そうに、だが堂々と片目のダルマを持ち去る。

30

テレビ画面—ワルシャワの八月

日本にて、最も解読しがたいのは、音の聞こえないヨーロッパからの映像だ。ポーランド情勢を理解するには、六ヶ月かかった。

31

テレビ画面—地震の跡

反対に、地震のことなら、直ぐに分かる。昨夜の地震は、僕の理解を大いに深めてくれた。詩情は、不安定から生まれるのだ。

ユダヤ人はさ迷い、日本人は揺れるのである。

いつ引っ張られるとも知れぬじゅうたんの上に生きているから、日本人は、もろく、はかなく、取り返しのきく、仮象の世界で生きていく習慣を身につけたのだ。

惑星間をひた走る銀河鉄道。過去の世界で戦い続ける侍たち。これが、諸行無常というものだ。

32 テレビ画面—深夜番組

僕は、成人向け番組も見た。

ここにあるのは、コミックの場合と同じように記号、コード化した偽善だ。検閲がそれ自体見世物となっているのだ。

絶対的なものを隠蔽しながらさし示すこと。それは、宗教がつねにしてきたことだ。

33 ローマ法王の大きなポスター

東京の街路を彩る顔の中に、この年、新しい顔が出現した。ローマ法王の顔である。

これまで門外不出とされたヴァチカンの秘宝が、百貨店に展示されたのだ。

彼は書いてきた。

「人々の目には、産業スパイのような輝きがある。二年以内に、より廉価で高性能のカトリシズムが、発売されるだろう。他人のものとはいえ、神聖なものには、特別の魅力がある。

34

秘宝館

すると、北海道の定山渓で見られるような、聖なるしの展覧会が、パリのデパートで開かれるようになるのは、いつのことだろうか。

ここは、博物館であり、礼拝堂であり、セツクス・ショップでもある。この場所に来ると、思わず微笑を誘われてしまう。日本で感嘆させられるのは、異なる世界を仕切る壁があまりに薄いことだ。彫像を眺め、ダッヂワifixを買い、さい錢を投げることが、同じ動作で出来てしまうのだ。彫像のおおらかさには、テレビの企みも、色を失ってしまうだろう。

ここにいると、原罪以前の世界にいるのではないかと思えてくる

る。人々は噴水の回りに集まる。女性が、楽しげにその噴水に触れる。その時、すべては宇宙的な無垢の様相をおびる。

この博物館の第二部は、はく製の動物たちで見せる性の世界だ。それは夢見られた地上の楽園なのかも知れない。しかし僕はむしろ、この動物たちの姿に、日本社会の根本的な裂け目を見てしまう。男と女を分断するその裂け目は、生活の中で、二つの形となつて現われる。一つは、血に染まつた罪。もう一つは、清少納言の憂愁に近い、包み隠されたメランコリーだ。日本人はそれら二つを「もののあはれ」という一語で呼ぶ。この言葉を翻訳することは難しい：

カトリシズムは人間が動物へ転落することを非難する。ここでは、動物たちが「もののあはれ」に挑戦しているのだ。

佐村浩一の文章を引用することで「もののあはれ」の色合をあなたに伝えよう。

「時はどんな傷も癒すと言つたのは、誰だろう。むしる時が傷以外の全てを癒すというべきだ。確かに、時がたてば、欲望される肉体は存在しなくなる。そして、欲望する肉体も消滅する。肉体のない傷口は、残るのだ。」

レビュイリストロースが、日本の秘密と名指したこの「もののあはれ」は、物と同じ気持になり、物の中に入り込み、時として、物自体になることを前提としている。そのとき逆に物は、人と同じよう、滅び、かつ不滅な存在になるだろう。

アフリカでは、アミニズムについては、しばしば語られる。だが、この概念は、日本にはほとんどあてはまらない。だから、全てのものが人間と同様死んで魂となつて残るのは当然だ。

では、あらゆる物に靈が存在するというこの信仰を何と呼べばいいのだろう。工場やビルを建てるときは、その土地の守護神を鎮める儀式から始める。筆や、算盤、針のためにさえ、儀式がある。

例えば、九月二十五日は、人形の魂を慰める日だ。人形は、観音に捧げられ、燃やされる。

神風特攻隊の出撃を見ていた人も、きっとこの人たちと同じ表情をしていたに違いない。

37 ギニア・ビサウ

彼は、書いてきた。

ギニア・ビサウの映像には、カポヴエルデの音楽を付けなければいけない。カブラルが夢見た統一のために。

この小さな貧しい国に、世界の関心が向けられるだろうか。

彼らの解放運動は、ポルトガル軍を震撼させ、本国の独裁制をも揺るがした。一時は、革命の到来すら信じさせた。それを今、思い出す人がいるだろうか。歴史は空ビンを窓から投げ捨てながら流れゆく。

38 ピジグイティの桟橋

今朝、僕はピジグイティの桟橋にいた。一九五九年、最初の犠牲者がここで倒れ、すべてが始まった。今、港湾労働者たちのも

の憂い動きの中に、かつての戦いを見ることは難しい。

第三世界のリーダーは、独立直後には、皆同じ返答をする。

「今こそ、本当の問題が始まるのだ。」と。カブラルは、そう答える前に、暗殺されてしまった。

だが、問題は何ら変わっていない。労働と生産と分配。そして、戦争の後の疲労。さらに、権力や特權の誘惑をどう乗り越えれるのか。：ロマンチズムとは何の関係もない問題だ。歴史は、甘えようとする者には、苦いのだ。

39

プライアの市場

僕の個人的問題は、極めて明快だ。ビサウの女性たちをいかに撮影するかということだ。ここでは、眼の魔術的機能が、明らかに僕に不利に働いている。

僕がまなざしの平等性を見出し、一連の表情が誘惑の儀式に近いことを知ったのは、市場でだった。

僕は彼女を見る。彼女は、僕が見ていることを、知っている。

僕へのまなざしは、巧みに外される。だが、ついに真正面から本当のまなざしが、やって来る。それは、フィルムの一駒の時間、

二十五分の一秒続いた。

40

働くアフリカの女性

女は皆、壊すことの出来ないルーツを持つている。男の仕事は、女がそれに気付くのを、出来るだけ遅らせることだ。アフリカの男たちも他の国の男たちと同じ位この技にたけている。アフリカの女を見ていると、男が勝つ方には、賭けないのが賢明のようだ。

41

渋谷ハチ公前

彼は、ハチ公という犬の話をしてくれた。

一匹の犬が毎日、主人を駅に迎えにいった。主人が死んでも、犬は生涯待ち続けた。感動した人々は餌を与え、死後、銅像を建てた。今も、忠実な魂が飢えないよう、像の前には食べ物が供えられている。

三越のライオン、そして店内(パソコン・紳士服売場)

東京はこうした小さな伝説と、媒介者としての動物で一杯だ。三越のライオンは、創業百年祭にヴエルサイユを借り切ったフランス好きの社長のかつての帝国だった国境を見張っている。私がそこで見たのはパソコン売場で少年たちが脳を鍛えている姿だった。

未来の歴史の教科書には、集積回路の戦争が、ペルシアと戦つたアテネの戦士たちのように語られるのだろうか。

今シーズンの紳士服の流行は、ジョン・F・ケネディーさえもブランドにしてしまったようだ。

有楽町、数寄屋橋交差点に見る政治地図

共産主義の国際的陰謀に反対して熱弁を奮う日本愛国党総裁、赤尾敏の老いた亀のような姿を、彼は毎日見かけた。彼はこう書いてきた。

反対側の歩道では、左翼が発言している。一九七三年、東京で
ら致された韓国野党の指導者、金大中氏の生命をＫＣＩＡが脅か
しているというのだ。ハンガード・ストライキが始まられ、支援グ
ル僧侶がいた。そして今は、右翼が北方領土返還を叫んでいる。
しかしときどき、アメリカと貿易摩擦を起こすより、ソビエトと
の交流をより活発にするべきではないか、という答えが返ってく
ることもある。何ごとも、単純ではないのだ。

六十年代、彼は成田で、空港建設に反対の農民たちの裏には、
ソビエトがいるとふれ回っていた。フランスのロワツシー空港の
場合と同じように。

旗を立て、メガフォンを付けた右翼の車は、もはや東京の景色
の一部だ。赤尾敏は、予言者として戦場に赴く以外には、この場
所を離れないだろう。ハチ公のように、この交差点に銅像を建て
て貰えるかも知れない。

ループが、署名を集めようとしている。

45

成田

僕は、成田に帰ってきた。空港闘争の犠牲者の命日だった。あれから十年が経っていた。僕には、このデモが現実のものとは思えず、荒唐無稽な劇のように感じられてならない。

同じ俳優、同じ目標、同じヘルメット。同じスローガン。同じ制服の機動隊。だが、ただ一つ変わったものがある。一本の滑走路だ。

確かに、空港は建設されてしまった。しかし、張り巡らされた有刺鉄線を見ると、包囲されたのは、空港のように思える。

46

活動家たち

こうした事態に、友人の山猫駿雄（やまねこ・はやお）は、解決策を見つけた。現在の映像を変えられないのなら、過去の映像を変えよう。

それは、もはや手に入れることの出来ない現実の、コンパクトな形態などというようなものでない、確かに映像なのだ。

彼は、シンセサイザーで処理した六十年代闘争の映像を見せてくれた。「テレビで見る映像より嘘が少ない」と、彼は確信を持つて言う。

47

ゾーン（シンセサイザーの映像）

駿雄は、タルコフスキイに敬意を表して、それをゾーンと呼ぶ。

48

成田

成田が、僕に見せてくれたのは、六十年代の人々の映像だった。

愛するということが、もし幻想を抱かずに愛するということなら、僕は、あの世代を愛したと言える。彼らのユートピアには、感心しなかつたが、しかし、彼らは何よりもまず叫びを、原初の叫びを上げたのだった。

闘争は、具体面では失敗した。だが、農民たちは、闘争の中で、自己を発見した。また、闘争がなければ、彼らの目が、世界に向けて開かれることもなかつただろう。

49

若者たち

学生たちの中には、肅清の名のもとに、山中で殺しあった者もいた。また、打倒すべき資本主義を研究しすぎたあまり、その最良の幹部となつた者もいる。他の運動と同じく、ここにも、陰謀家もいれば出世主義者もいたのだ。

しかし、この運動は、チエ・ゲバラのように「ただ一つの不正にも身を震わす」という人々すべてを、立ち上がらせたのだ。

このやさしさは、彼らの政治行為そのものよりも、長い生命を

持つことだろう。だから、二十歳は一番美しい季節ではない、などとは、僕は決して言わせない。

50 新宿

週末ごとに、新宿に集まる若者たちは知っている。青春がこれから的人生への準備期間ではなく、人生そのものだと。今すぐ味あわなければならない。

大人たちは、絶えずこの簡単な秘密を隠そうとしている。クラスマイトを十三階の屋上から突き落とした十才の女の子は、この秘密を知らなかつた。子供の自殺を防ぐため、電話相談の増設を要求する親たちは、やがて自分たちが、秘密を隠しすぎたことに気付くだろう。

ロックは、この秘密を伝播させる国際語だ。しかし、東京には、もう一つの固有の言葉がある。

51 竹の子族

竹の子族にとって、二十歳は引退の年齢だ。

僕は日曜日ごとに、彼らが踊るのを代々木公園に見に行く。彼らは目立とうとしているのだが、目立つていてることに気付かないふりをしている。彼らは、見えない水族館にでもいるように、群衆から隔てられている。

初めてこの星のしきたりを学ぶ少女を、僕は午後一杯観察する。

彼らは、皆、名札を付け、笛に合わせて動く。暴力団に金を脅し取られる彼ら。リーダーは常に男だ。

52

新宿の地下街

ある日、彼はこう書いてきた。

僕が頻繁に見る夢の舞台は、地下街だ。それは都市を拡大し、その裏側を形作る。

ある顔が浮び消え、足跡が見付かり、失われる。翌日、目が覚めると、前夜地下の迷路で無くしたものを探し続けている自分に気がつく。夢のフォークロアが、あまりに鮮明なのだ。

果たしてこの夢は、僕個人のものだろうか、それとも巨大な集合的な夢の一部なのだろうか。この都市全体が、集合的な夢の投

映なのかもしれない。

地下街の電話からは、「悪魔が夜来る」のラストのように、清少納言の胸のときめきが、聞こえてくるのかもしれない。

この地下街に続く、小田急・京王デパートと同じ名前の電車は、眠る人々で一杯だ。彼らの夢のかけらを集めて、ただ一つの絶対的な映画が作られよう。その時、自動販売機の切符は、この映画の入場券だ。

53

駅の階段を登つてくる群衆

彼は私に、駅の階段に射す一月の光のことを語つた。
彼は言う。

この町は楽譜のように読まなければならない。オーケストラのような大集合や、細部の集積に惑わされてはいけない。そうすると、人口過剰、誇大妄想、非人間的な町といった、東京の卑俗なイメージが出来上がってしまうのだ。

彼は東京に、もっと微妙なサイクルや、リズムを知覚出来ると考えていた。銀座のソニー・ビルの階段は、一段一段が、音階になっていて、それ自体が楽器だ。東京は、この階段のように、音楽と対応する方法で、向かい会うべきなのだ。すべては、フーガ

の何声かのように重なつてゐるが、そのうちの一聲を捕えて、放さないようにすればよい。

テレビからの一声がその一例だ。銀座のショールームで相撲を見ていたのは、テレビも買えない貧乏な人々だった。東京で一番貧乏なのが彼らだ。彼はそこに、いつか一緒に酒を飲んだ、なみだ橋の浮浪者が、突然現われるのを見た。

あらから幾つ季節が、過ぎ去ったのだろう。

54

秋葉原電気街のパーソ・ショップ

彼はこう書いてきた。

電子部品の市場にも、東京の特別な楽譜がみつかる。それは、ヨーロッパでは、まったくなじみのない音。テレビ・ゲームの奏でる音楽だ。それは僕をヨーロッパから追放する。そこでは、飲食しながらでもゲームが続けられる。

ゲーム・センターは、道にも向かって開かれている。その音を聞いてみると、記憶でゲームが出来るほどだ。

もぐら叩き

いろいろなゲームが日本から生まれた、世界中に出回った。

例えば、アザラシのかビーバーのか僕には未だに分からぬ動物が頭を出すやいなや、叩くという反エコロジスト的なゲームがある。こうしたゲームの日本的なバリエーション。それは、動物が人間に代えられて、一番上には社長、その下に常務、部長。一番下に課長と係長といった名札を付けられている。

僕が撮影した男は、羨ましいほどのエネルギーで、このヒエラルキーと格闘していた。彼にとつて、このゲームは、アレゴリーでは無いという。本当に自分の上司だと思って叩いていると言うのだ。

だから、課長の人形は、最も頻繁に頭を叩かれて壊され、再び、アザラシと取り替えなければならなかつたのだろう。

駿雄のテレビ・ゲーム

駿雄は、テレビ・ゲームをプログラムしている。僕を喜ばせるために、僕の好きな猫とフクロウをインプットしてくれた。

ビデオ画面—エレクトロニクスの想像力

エレクトロニクスだけが、感情と記憶と想像力を扱うことがで
きると、駿雄は主張する。

例えば、溝口健二によるアルセーヌ・ルパン。あるいは、差別
された一部の空想上の人々。それら存在しない人々をどうやつて
表わせるのだろう。

しかし、僕は彼らを見たことがある。彼らは、中世から見返り
のない仕事に身を捧げている。明治時代以降、彼らは差別される
存在ではなくなつた。

彼らの本当の名は、タブー、つまり発音してはならない言葉だ。
彼らが「人に非らざる」ものなら、「映像に非らざる」以外のど
んなやり方で、彼らを見せられるのだろう。

パックマン

テレビ・ゲームは機械による人類救済計画の第一歩だ。現代の
乗り越え不可能な哲学は、パックマンに含まれている。僕は、手
持ちの百円玉を全てパックマンに注ぎ込んだが、瞬く間に世界を

上野動物園の動物葬

征服しようとは思いもよらなかつた。おそらく、これは人間の条件の最も完全なグラフィック・メタファーだろう。

攻撃の数を重ねることに多少の名誉はあっても、結局、悪い結果を生むことを、パツクマンは簡潔に教えてくれるのだ。

菊の花が、人間の葬式にも動物の葬式にも飾られることを、彼は喜んだ。そして、上野動物園のその年に死んだ動物たちの靈を弔う日のこと書いてきた。

パンダの死によつて、この日は、二年続きの悲しみに包まれた。新聞で読む限り、パンダの死は、同時期に死んだ首相の死よりも、取り返しのつかないものらしい。去年、人々は本当に涙を流していた。今年はすこしは慣れたらしい。おとぎ話の中で、龍が毎年娘をさらっていくように、死が毎年パンダをさらっていくことを受け入れた様子だ。僕はこんな話を耳にした。

「我々東洋人にとつて、生と死を隔てる壁は、西洋人ほど厚くない。」

西洋人の僕が、死にゆく人々の目から頻繁に読みとつたのは、不意を打たれた驚きだった。しかし今日、この日本の子供たちの

眼に見られるのは、壁の向うを見ようとする好奇心だ。

60

ビジャゴス列島の岸辺

死が乗り越えるべき壁ではなく、辿るべき道であるとする国から僕は帰つて来る。ビジャゴス諸島の偉大な先祖たちは、死んだ人々の辿る道筋を今に伝えている。死者がどのように厳格な儀礼にのつとつて島々を巡り、あの世の浜辺に至るのかを。

ここでは、たとえ我々が、旅の途中の死者に出会おうとも、決してそれを死者だと、認めてはならないのだ。

61

モノクロームの映像（カブラル兄弟とゲリラ）

ビジャゴスの島々は、ギニア・ビサウの一部である。この古い映像の中で、アミルカル・カブラルは、岸辺に向かって手を上げている。だが彼は、二度とその岸辺を見るることはなかった。

十五年後、カヌーの上で、ギニア大統領ルイス・カブラルは同じ動作をした。

ルイスとアミルカルは、腹違いの兄弟だった。二人は、ギニアとカポヴエルデの血を引き、ギニア・カポヴエルデ・アフリカ人民独立党、ペイ・ジエ・セの創立メンバーだった。彼らは、植民地だったギニアとカポヴエルデを闘争という運動で結び付け、両国による連邦を夢見ていた。

僕は、かつてのゲリラたちの話を聞いた。彼らは、同じように非人道的な条件で戦った敵にも同情を寄せたという。それを聞いて、僕は、かつて、ある種の映画の作り方を「ゲリラ的」と軽率に呼んだことを恥じた。

あの時代、ゲリラと言う言葉は、数多くの理論闘争と、現場での敗北を意味していた。ゲリラの指導者として、アミルカル・カブラルは、単に軍事的な意味だけではない勝利を得ることの出来る、ただ一人の人物だった。自分の民族を研究し、解放された国が、これまでとは違う社会への始まりになることを望んでいた。

極左の人々は、歴史に寛容でなければならない。社会主義国は、武器を送り、社会民主主義国は、人民の店に商品を送るのだ。

彼は、闘争のあいまいさを恐れなかつた。彼は、こう述べている

「我々は、嵐に荒れ狂う大河を前にしている。渡ろうして溺れる人もいるだろう。しかし、我々には他の道はない。渡らねばならないのだ。」

そして今、舞台は一九八〇年二月十七日のカサカへと移る。しかし、この状況を読み解くためには、さらに時間を先に進めねばならない。一年後、一九八一年、ルイス・カブラルは投獄され、彼に勲章を与えられて泣いた男、ニノ司令官が、権力の座についた。党は分裂し、ギニア人とカポヴエルデ人は、争いを始めた。

訪問者の目には、連帯のきずなを永遠にするかに見えたこの勲章授与式も、様々な苦渋が裏にあったのだ。ニノの涙は、かつての闘士としての感動ではなく、自分が正当な評価を受けていないという無念の涙だったのである。

これらの顔の一つ一つに、それぞれの記憶がある。

共通の記憶と思われる場から、無数の記憶が生まれ、バラバラに歴史の亀裂の中をさまっているのだ。

ポルトガルの蜂起

ビサウから発せられた波は、ポルトガルを蜂起させたが、独裁制と生涯闘ったミゲル・トルガは、こう述べている。

「闘争の末端を担う分子たちは、彼ら自身をしか代表していない。彼らは、社会の変革を求めるのではなく、革命に自己のイメージの実現を追い求めているだけなのだ。」

アミルカルは、自らの党員によつて暗殺され、解放された地域は、残虐好きの暴徒たちにじゅうりんされた。そしてその次に、その暴徒たちが、中央権力によつて一掃された。

中央権力は、誰の目にも安定しているように見えたが、それも軍事クーデターまでのことだった。

歴史は、耳を塞ぐように記憶を封じ込めながら展開していく。ルイス・カブラルは、キューバに亡命した。今度は、ニノが陰謀をされる側だ。彼らは、歴史の前に出頭すべき人物として、お互いの名をあげることだろう。

だが、歴史には、何も聞こえない。歴史の味方は、ただ一人しかいないのだから、それは、「地獄の暗示録」でマーロン・ブランドンが語つたもの。つまり、恐怖。名前と顔を持った恐怖なのだ。

駿雄のゾーンの中で唄う女性歌手

こうしたことを、僕はまったく別の世界からあなたに書き送つて
いる。

しかし、この二つの世界は、繋がっているのだ。一方の世界の記憶は、他方の世界の歴史となる。不可能性、伝説は、解読不能なものを解読しようとするとそこから生まれる。記憶は、錯乱と混沌を甘んじて受けなければならない。

現実を一瞬でも停止させようとすれば、それは映写中に走行を止めたフィルムのように、燃え尽きてしまうだろう。

僕は、駿雄のゾーンが羨ましい。彼は、自分の記憶を記号化して戯れる。時間の束縛から解放されたそれらの記憶を、標本箱に昆虫を飾るようにして、時間の外という永遠の一点から眺めているのだ。

僕は機械を眺め、個々の記憶が、各々の伝説を作りあげることの出来る世界を考える。

彼は、私に書いてきた。不可能な記憶、錯乱した記憶を表現することができた映画が、一本だけあるとすれば、それはヒッチコックの「めまい」だ。タイトル・バックの螺旋の中に、彼は、遠ざかれれば遠ざかるほど大きくなる時間と、現在の一瞬に不動の目を持つ熱帯低気圧サイクロンを見ていたのだ。

彼は、サンフランシスコでこの映画の舞台の全てを巡礼する。ジェイムズ・ステュワートがキム・ノヴァクをかいしま見る花屋ボデスター・バルドキ。ステュワートがハンターで彼女が獲物なのか。それともその逆か。ジェイムズ・ステュワートのスコッティーが、キム・ノヴァクのマデリンを追跡した丘を、車で駆け巡る。

この映画の主題は、尾行、謎、殺人のように見える。が、本当の主題は、権力と自由、メランコリーと眩惑なのだ。あまりにも巧妙に螺旋の中に記号化されているために、空間との格闘として描かれる「めまい」が、時間の「めまい」を意味していることには人は気づかない

彼は、すべての跡を追い、ミッシン・ドロレスの墓に辿りついた。ここで、マデリンは、彼女が知るはずもない、遙か以前に死んだ女性の墓に祈った。彼は、スコッティーかしたようにマデリンを追つてレジオン・ドナルド博物館に行った。そして、マデリンが心を惹かれたあの死んだ女性の肖像を見た。その肖像にも、マデリンの髪の毛の中のように時間の螺旋が描かれていた。

「めまい」の跡を追つて（ホテルとセコイア）

マデリンが姿を消したヴィクトリア様式のホテルは、建物も無くなっていた。そこにはコンクリートのビルしかない。反対にセコイアの年輪は、相変わらずミュアード・ウッドの森にあつた。マデリンは、この樹の年輪の狭い部分を指し、「私の人生は、この空間だわ。」と言つた。

彼は、このシーンが引用されたもう一つのフィルムのことを思いだした。そこでは、パリの植物園のセコイアが、時間の外の点を指示していた。

「めまい」の跡を追つて（木馬の目とミッションのアーチ）

木馬の目は彼女の目にそっくりだった。すべてが、そこにあつた。彼は、ミッションのアーチの下を走つた。マデリンが、死に向かつて、疾走したように。だが、それは、彼女の死だつたのだろうか。

「めまい」の跡を追つて（教会からゴールデン・ゲートへ）

愛の狂気と、再構築不能の記憶の故に、墜落していくスコットナーの姿を、彼は想像した。スコットナーは、マデリンの分身を、時間の別の次元の中に作りだしたのだ。その時間は、彼だけのゾーンで、その中でならば、ゴールデン・ゲートに始まつた解読不能の物語を読み解くことが出来るのだ。彼は、マデリンを死から救い、そしてまた死の中に投げ捨てた。いや、それともその逆だったのだろうか。

アイスランド

サンフランシスコで十九回も見た映画への巡礼をした僕は、アイスランドで、空想上の映画の最初の一石を置いた。あの夏、僕は三人の少女と出会い、火山が海の中から噴出した。

アメリカの宇宙飛行士たちは、月に行く前、月世界に似たこの場所に訓練に来た。僕もまた、SFのように、ここに別の惑星の風景を見る。いや、それは別の天体からやってきた人の見る、我々の惑星の姿だ。僕はその異星人が、粘り着くこの火山土の上を、重たげ

に、潜水夫のように歩く様を思い浮かべる。突然、彼はよろめく。次の一歩を踏み出すのは、一年後だ。彼は、オランダ国境近くの、海鳥の保護地区に沿った小道を歩いているだろう。

71

未来人の見た地球

出発点はここだ。なぜ時間を切り、思い出を繋ぎ合わせるのか。彼は、別の惑星から来たのではない。未来からやって来たのだ。四〇〇一年、人間の脳が完璧に使用される時代から來たのだ。その時代には、記憶も含めた、我々が眠らせている全ての能力が、完全に機能している。その時、完全な記憶とは、麻酔をかけられた記憶のことだろう。記憶を失った人間の数々の物語のあとに、忘却を失った人間の物語が始まるのだ。

風変わりな未来人の彼は、無知蒙昧な過去の人類を軽蔑するのではなく、好奇心と同情を寄せるだろう。彼が後にして來た世界では、思い出に耽つたり、絵画を見て感動したり、音楽を聞いて身を震わせたりすることは、苦難に満ちた先史時代のシンボルでしか在りえない。

彼は、この時間の不条理を、不正だと感じる。ゲバラのように、六十年代の若者のように、彼は、怒りを持つて、対する。自分たち

ふくろう、公園の日とかげり

勿論、僕はこの映画を作ることはないだろう。

だが、僕はモチーフを集め、ストーリーの細部を考え、そこに僕の好きなものを配し、題名さえつける。あのムソルグスキーの歌曲のタイトルだ。「サン・ソレイユ」、すなわち「日の光もなく」

の時代に悲惨が存在することが許し難かつたのと同じように、彼には、自分の惑星の過去に不幸が存在したということが堪え難いのだ。彼は「時間の第三世界」の擁護者なのだ。

勿論、彼は失敗するだろう。豊かな国の子供が、貧しい国の悲惨を想像できないように、彼には、過去の不幸に近付くことができないのだ。彼は自分の特権を手放すことを選んだが、しかし、そのこと 자체が、すでに特権的なのだ。

彼の持っていた唯一の切り札が、この不条理な探求へと彼を驅り立てる。その切り札とは、ムソルグ斯基の歌曲だ。四十一世紀においても、そのメロディーは歌われている。彼は、そこに初めて、記憶と不幸にまつわる何かが存在しているのを認めたのだ。何としても理解しなければならない、何か。その何かに向かって、彼はまた、重い足取りで歩み始める。

一九四五年五月十五日午前七時、アメリカ第三八二歩兵連隊は、のちに彼らが、ディック・ヒルと呼んだ沖縄の丘を攻撃した。日本の国土を攻撃していると思つてゐる兵士たちは、琉球の文明のことなど、何も知らなかつたであろう。僕も何も知らなかつた。ただ、糸満の市場の女性の顔が、歌麿よりゴーガンを思いださせることを除いては。

封建時代の何世紀もの間、沖縄では、時は動かなかつた。女性を記憶の語り部にするのは、島の特色なのだろうか。ビジヤゴスと同じように、信仰を司どるのは、女性だと聞いた。どの村にも、ノロという巫女がいて、葬式以外のあらゆる儀式を取り仕切るのだ。

日本軍は、必死に防戦し、アメリカ軍は、その日の終りになつても、丘の中腹にまでしか進めなかつた。僕が村人について登つたのもそんな丘だ。

ノロは、あらゆる神々と交渉を持ち、その神々のことを、出世した家族の誰かのように語る。誰もが、姉にして女神であるこの女性の前に額付く。何故なら、それは、姉と弟という、絶対的関係の反映なのだから。

夜明けに、アメリカ軍は、退却した。沖縄が、降伏し近代世界に

入って行くには、さらに一ヶ月以上の戦いを要した。

二十七年間の占領の後、日本の主権の回復した今、ノロたちは、ボーリング場やガソリン・スタンドの傍らで、神々との対話を続けている。彼女たちがいなくなれば、その対話も止む。人々は、死んだ姉が、彼らを見守っていることも、忘れてしまうことだろう。

74

ノロと村人

この儀式を撮影しながら、僕は、何かの終えんに立会っているのだと感じた。消え行く神話的文化は、その後にやってくる文化に痕跡を残すだろうが、それに続く文化は、何の足跡も残しはしないだろう。歴史の断絶が、余りにも大きすぎるのだ。

二百人の少女が、アメリカ軍の手に落ちまいとして、手りゆう弾で自決したざん壇の側で、僕は歴史の裂け目に触れた。人々は、ざん壇の前で、写真を撮り、土産物屋では、手りゆう弾の形をしたライターが売られている。

75

カラー・シンセサイザーで画像処理された太平洋戦争

駿雄のビデオでは、戦争は、火を付けられた手紙のように燃えあがり、火が回るように広がつて行く。真珠湾攻撃の暗号は、「トラ・トラ・トラ」だった。あの豪徳寺に葬られた猫の名前を三度唱えた時、すべてが始まったのだ。

沖縄の海上で、アメリカ艦隊に襲いかかつた神風特攻隊は、伝説と化した。だが、満州の凍つた大地に捕虜を晒して、骨と肉の離れる速度を計っていた特殊部隊よりはいいと、自ら進んで志願したのかもしれない。決して、彼ら全員が熱血のサムライでは、なかつたのだ。そのひとり上原良司は、こう書いて、散つて行つた。

「私は、明確に言えば、自由主義に憧れています。日本が、真に永久に続くためには、自由主義が必要であると思ったからです。それは、現在、日本が全体主義的な気分に包まれているからです：特攻隊のパイロットは、敵の航空母艦に向かつて吸い付く磁石の中の鉄の一分子に過ぎぬのです。一機械である吾人は何もいう権利もありませんが、ただ、願わくば、愛する日本を偉大ならしめらるん事を、国民の方々にお願いするのみです：

明日、自由主義者が一人この世から去つて行きます。彼の後ろ姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。御無礼をお許しください」

アフリカに行く度に、彼はサール島に立ち寄る。この島は、大西洋に浮かぶ塩の岩だ。島の外れ、サンタ・マリア村と彩色された墓標を過ぎると、砂漠に出る。

彼は、こう書いて来た。

僕は、まぼろしを見るという事が、何であるかを理解した。何も存在しない砂漠に現われてくる映像を、人は信じたくないのだ。

イル・ドゥ・フランスにもエミューがいるとあなたに言つただろうか。イル・ドゥ・フランスとこのサール島、イル・ドゥ・サールという言葉に触発されて、二つの塔が想い起こされる。ジャンヌ・ダルクで有名なモンテピヨワの塔と、石油とともにされている最後の燈台の一つ、サール島南端の塔だ。

長距離郵便機の乗務員たちは、サール島で交代する。彼らのクラブは、無と接したこの土地に、海水浴場のような雰囲気をもたらし、他の場所は、ますます非現実的な色彩を帯びる。彼らの与える餌で、のら犬が海岸に住み着いている。

この夜、犬たちは、異常に興奮していた。犬たちが、これまで見
たことがない様子で、海と戯れているのだ。

ラジオ香港を聞いて、その理由が分かった。この日は、陰暦の正
月で、六十年ぶりに犬の星座と水の星座が、重なったのだ。

77

浅草

一万八千キロ・メートルの彼方。一月の光の下で動き回る影の
群れの中に、一つだけ動かない影がある。浅草の僧侶の影だ。

78

初詣での参拝客

日本でも犬の年が始まっている。寺々は、参拝客で一杯だ。こ
こには、生活を中断することなく、その中に滑り込む祈りがある。

世界の果てのサール島で犬と戯れながら、僕は、一月の東京を
いやむしろ一月に東京で撮影した映像を思い出している。今では

その映像が、僕の記憶に取つて代わり、それが僕の記憶そのものとなってしまっている。

写真も、映画も、ビデオも撮らない人は、どのようにして思い出すのだろうか。昔、人類はどのようにして、思いだしたのだろうか。

彼らは、聖書を書いたのだ。新しい聖書は、「時」のエンドレス・テープになるだろう。それは、ただ「時」の存在を確認するためにだけ、絶えず読み返さなければならない。

四〇〇一年、人類の記憶が完璧なものとなるその時まで、僕たちは、さしあたり正月のおみくじに願いをかけよう。ジャンヌ・ダルクのように、中継点を飛び飛びに歩んで行く僕たちの記憶が、より確実になるよう。

ラジオ香港の電波は、記憶をサール島から東京へと送り返す。そして、路上で目にした鮮かな色彩の思い出が、ほかの因、ほかの空間、ほかの音楽へと、限りなく記憶を運んで行く。

いる。

古い年を洗い落とし、新しい年を迎えるための日本の無数の儀式からは、最初に空気が淨められて出てくるかのようだ。「時間」に対する礼儀が要求する全ての義務を果たす為に、日本人はまる一ヶ月を必要とする。

最も興味ある義務。天神さまで買うウソ鳥。言い伝えでは、この鳥は、来たるべき年の嘘を食べるとも、嘘を誠に変えるとも言う。

だが、一月の街の色合いを一変させるのは、着物の出現だ。店でも、オフィスでも、証券取引所でさえも、仕事始めの日、娘たちは、襟巻きを付けた晴着姿で現われる。

超薄型テレビを発明し、世界の半導体の三分の二を征服する日本人にも、この時期ばかりはともあれ、着物姿の娘たちしか目に入らない。

一月十五日は、成人の日。若者たちの人生の門出を祝う日だ。
市役所では、祝いの品々と、良き妻、賢き母、良き社会人にな

どんど焼き

祭りが終わると、飾りや不用になつた道具が集められて、燃やされる。それがまた、一つの祭りとなる。

どんど焼きという祭りだ。これは、上野で燃やされた人形と同じように、いかなる残がいも、不滅のものとなるよう祝福する、神道の儀式だ。それはまた、“もののあはれ”の最終段階でもある。

片目のダルマは、焼かれるものの一番上で、この儀式を司じている。

捨てることが、祭りとなり、引き裂くことが祭りとなる。無くしたり、壊したり、使い古した物すべてとの別れが、儀式によつ

るための読本などを一杯に詰め込んだ袋が配られる。二十歳を迎えた若者はこの日、日本中どこでも家族に無料で、電話をかけられる。

て、崇高なものにされるのだ。

この儀式で僕に分からなかつたのは、長い竿で土を叩く子供たちの輪舞だ。僕は、もぐらを追う為だという奇妙な説明を受けた。そうだとすれば、何とかわいなお勤めだろうか。

82

アイスランドの少女

この時、アイスランドのあの三人の少女たちの映像が、忽然と立ち現われた。そのショットを再びインサートしよう。ややフォーカスのアウトした最後の部分も付け足して。その最後の部分は、断崖の上で僕らの頬に打ち付ける風のせいで、微妙に震えている。確かに、一度は捨てたカットだが、映像そのものの雄弁さは、他のそれを圧倒している。だからこそあの時、二十五分の一秒の最後の一駒に至るまで、僕の指はズームィング・リングを離れることがなかつたのだ。

五年後、ハイマエの火山学者ハルーン・タジエフが、同じ場所で撮影したフィルムを、送ってくれた。僕は、自然も“どんどん焼き”をするのだと知った。

僕は、かつての僕の窓を見る。懐かしい屋根やバルコニー。毎日かよつた散歩道の目印が、灰の中から、顔を出していた。ここを抜けて断崖へ行き、そこで僕は、あの三人の少女たちに出会ったのだった。猫好きの僕のために、ハルーンが撮影してくれた白いソックスをはいたような猫も、本能的に自分の家を捜し当てた。

僕は、この時間探しの旅で、最も正しい時間への祈りを、豪徳寺の婦人に見た。彼女は、トラの為にこう祈つたのだ。

「お前が何処に居ても、お前の魂が安らかでありますように。」

それから、旅はゾーンに入つて行つた。瞬間を引き延ばす螺旋の呪縛から解放され、すでに時間の幕に覆われ始めた僕の映像を駿雄は見せてくれた。

春が到来し、カラスは鳴き声を半音だけ高くしていた。

僕は、山の手線に乗り、中央郵便局に近い東京駅で降りた。僕宛の手紙がないとわかつても、局留の窓口に行つた。破られた手紙の靈を敬わなければならないからだ。そしてまた、エアーメールの窓口にも行つた。投函されなかつた手紙の靈に敬意を表わすためだ。

非存在に対して存在を、語られなかつた事に対して、語られた事を特権化する西洋のあの耐え難い虚栄について、僕は考えていた。

遠くから赤尾敏の声が聞こえてきた。そのスピーカーの反響も半音上がつていて。僕は、地下室に降りて行つた。そこには、エレクトロニクスで落書きをする友人が、マニアックに働いていた。彼の描き出す言語は、僕の心を打つ。何故ならそれは、牢獄の壁に絵を書こうとする行為に通底するからだ。

いま存在してない、或はもはや存在しない、或いはまだ存在しないものの輪郭を辿るチョーク。各々が自分の胸をときめかせるもののリストを作成するためのエクリチュール。それはそのリストを人に見せるためなのか、それともむしろ消し去るためなのか分からぬ。しかしその時、詩はすべての人によつて作られ、ゾンの中には、エミューがいるだろう。

ゾーンの中のプライアの女性

彼は日本からも、アフリカからも、手紙を書いてくる。
今では、フィルムの一駒しか続かないあの市場の女性の視線を
捕えることが出来る。と、彼は書く。

いつの日か、最後の手紙の來ることがあるのだろうか。

クレジット・タイトル

(終)

※この日本語版台本は、福崎裕子氏の
全訳原稿をもとに、原章二、野枝実両
氏の協力を得て構成したものです。ま
たナレーション録音に際しては、梅本
洋一氏により原版（フランス語版）の
画とナレーションとを考慮に入れた監
修がなされています。